神戸新聞 2022年12月12日 月曜日 面名 夕特２ 夕４ 2ページ

ぐるっと音楽紀行

旅するピアニスト 赤松林太郎 ♪23

イタリア・ミラノ

光あふれる音楽の祖国

スイスのチューリヒから翡翠色の湖に沿い、山々の裾を縫うように下っていく鉄道。氷河の長い歩みを感じながらイタリア・ミラノまでの車窓を過ごしたのが、つい先日のことのように思われる。

ミラノは人口100万を超す。その大きさの中心に立つドゥオーモ（大聖堂）は、他の都市を圧倒するかのような壮麗なゴシック建築。ルネサンスの香り漂うフィレンツェの大聖堂も、ドイツの黒い森を思わせるケルンの大聖堂もよいが、てっぺんに立つならミラノに限る。両腕を広げてミラノの大都会を見下ろす開放感。何しろ神様の家である教会の屋根の上を歩けるのだから。

2015年はイタリアが威信をかけたミラノ万博の年だった。にぎわう夏の都会で食事を楽しみ、スカラ座で連日コンサートを鑑賞し、エトロがデザインに携わった着物を持っていたご縁で、エトロ本店のサロンにも招いていただいた。銀座もとじ×エトロのコラボレーションによる着物は雑誌「美しいキモノ」でも私のコレクションとして掲載されたもので、ミラノでかなり人目を引いたにちがいない。

ミラノ滞在の最終日はフルヒト社でのコンサートだった。ラ・レプブリカで掲載されたこともあり、バカンスシーズンが終わったばかりにもかかわらず、多くの来場があった。学生時代にイタリアでホストファミリーをしてくれた友人も駆けつけ、私たちの結婚の祝福をしてくれた。妻とは数えきれないほどの旅行に出たが、婚姻届を提出した翌日から始まった旅は、楽しかっただけでなく、出会いや着想の可能性を多く含んだものだった。

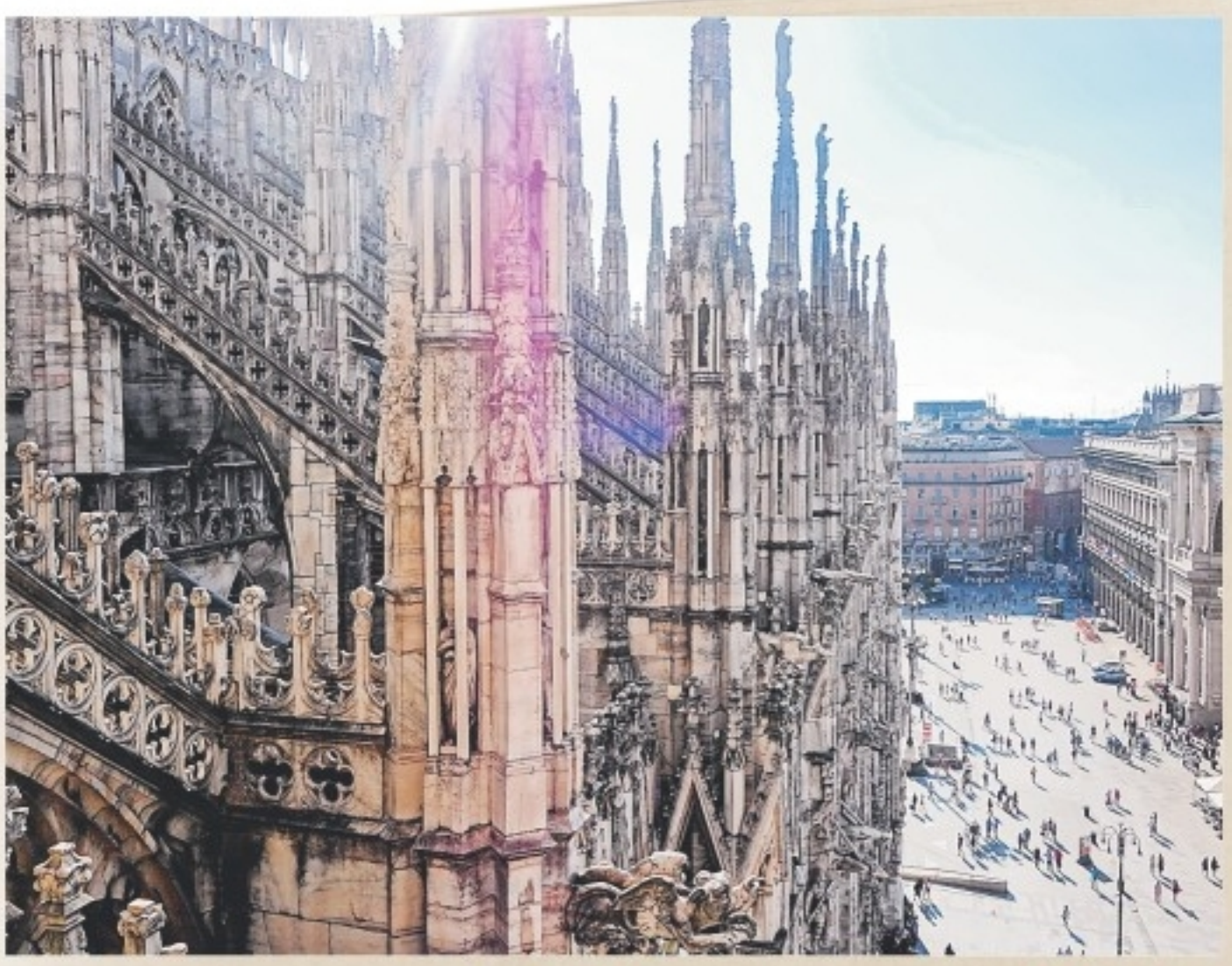
来年はミラノと同じロンバルディア州のブレシアで、夏期マスタークラスの教授として招聘されている。今ヨーロッパで大変注目されている講習会で、受講希望者も多く2週に及ぶため、8月いっぱいをイタリアで過ごすことになった。古くからアルプスを越えた交易で栄えた歴史を持つブレシアは、美しい世界遺産を持つ。

イタリアを旅すると、長い歴史の中で多くの街道を築き、人を送り続けてきたことを実感する。リソルジメント（19世紀のイタリア統一運動）の機運が高まる中でオペラ作曲家ジュゼッペ・ヴェルディはミラノに向かい、オットリーノ・レスピーギはカトリックに導かれるようにローマにとどまり、グレゴリアンの音を見いだした。

人間の男と女のオリジナルを忠実に描き上げたフェデリコ・フェリーニ監督の「道」も感慨深く、この作品自体が一つの真実の街道のようにも感じられる。いずれにしても、イタリアには永遠へと続く道があり、尽きることなくあふれ出る光によって、並木はおびただしい実を付けてきた。

イタリアは音楽の祖国。コロナ禍によって失われた3年間という幕間の休息を経て、次の幕の物語に入るような気持ちでいる。

◇次回は来年2月13日に掲載。



ドゥオーモ（大聖堂）から街を望む＝いずれも2015年、イタリア・ミラノ（赤松林太郎さん提供）

スカラ座で、エトロがデザインに携わった着物を着る赤松さん

あかまつ・りんたろう 1978年、大分県生まれ。２歳から神戸で育つ。兵庫高、神戸大発達科学部卒。パリ・エコール・ノルマル音楽院高等演奏家資格首席取得。2007年に帰国し、国内外で活動。大阪音楽大准教授、洗足学園音楽大客員教授。神戸市在住。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。